リバティおおさか

昨日レポートした「前川喜平さんトークライブ」後、リバティおおさかの展示を見学できた。かなり前に見学に来たが、新たな発見も多かった。

展示室に入り、すぐに写真の「人工呼吸器をつけて生きる」に注目した。平本歩さんをはじめ、バクバクの会の皆さんの写真が並ぶ。「学校での生活」「地域の中で」と綴られている。まえに来たときにも展示されていたと思うが、あまり記憶に残っていない。4 年半前に人工呼吸器をつけて元気に学ぶ林京香さんと出会ってから、こうした問題に関心を持つようになった。あらためて京香さんに感謝したい。

先に進むと、「水俣病に 50 年向き合った原田正純医師」の大きな写真などが展示されていた。原田先生の笑顔が心に残った。時間がなくて、展示室を駆け足で回ったが、またゆっくりと来てみたい。展示コーナーは、3 つのゾーンに分けられている。1 いのち・輝き、2 共に生きる・社会をつくる、3 夢・未来である。人工呼吸器は 1、原田先生は 3 のコーナーである。

リバティおおさか、正式には大阪人権博物館は 1985 年に開館した。設立趣意書から―「この資料館は、大阪における同和問題を中心とする人権問題に関する資料を『なにわ』の庶民の生活、文化とのかかわりの視点から見つめ直して、蒐収し、保存するとともに、これらを常時一般に公開することによって、同和問題をはじめとする人権問題の生きた教材、学習の場を提供し、広く人権意識の啓発の場として活用していくものであります。」

2013 年度から、大阪市は大阪府とともに当館に対する補助金を全面的に廃止した。それに伴い当館は運営費を半分以下に抑えて「自主運営」の道を歩むことになる。寄付やサポーター―などを募り、職員と開館日を大幅削減し、なんとか自主運営を継続してきた。さらに追い打ちをかけるように、大阪市は 2015 年 7 月、博物館の建物撤去と土地の明け渡し、裁判終了までの間、毎月 250 万円の賃料相当額を遅延損害金として支払いを求め、大阪地裁に提訴した。

毎日新聞 2016 年 8 月 19 日朝刊で、戸田栄記者が「大阪人権博物館 閉館の危機」と問題を投げかけている。橋下徹氏が大阪府知事に就任後、同館の苦境が始まる。2013 年 3 月末、府市は展示内容などを理由に補助金を全廃した。そして、大阪地裁に提訴し、今も審理が続いている。「負の歴史 気づきの場」「差別と偏見研究資料総数 3 万点」と。大阪「維新政治」と関わらせて、リバティおおさかに注目していきたい。

（2018 年 4 月 3 日）